

恩と人間形成  
—正岡子規と陸羯南の考察—

工藤 真由美\*

Onn and the Human Development  
—Through a Study of Shiki Masaoka and Katunann Kuga—

Mayumi Kudo

明治に入り俳句や短歌の革新を行い、死の直前まで創作に生きた正岡子規。彼の生活面、精神面を支えたのは、日本新聞の陸羯南であった。子規は自己の墓碑銘を用意し、そこに「日本新聞社員タリ 月給四十圓」と記す。この表記は子規が生きた証として後世に残すものは、日本新聞の社員であることの誇りとそれを与えてくれた陸への恩であることを示すと考えられる。病人である子規はただひたすら恩を受けながら、その恩をいのちの原動力として、「書くこと」「表現すること」のうちに最後の生を全うするのである。恩とは人が人間として醸成されていく中でその人の生涯に決定的な何物かを与え続ける存在である。

**Key words:** 正岡子規、陸羯南、恩、人間形成、日本新聞

はじめに

かつて拙著において明治という新しい時代に病床にありながらも俳句・短歌の革新、写生文の創作に取り組み、死に向かう自己と自然とを見つめつつ生きた正岡子規の生涯を自己形成という観点から論じたが<sup>(1)</sup>、その子規の成熟の過程を、物心両面で支えた人物がいる。日本新聞社主、陸羯南である。本稿では、子規と陸羯南の関係を「恩」という観点でとらえることをとおして、人間形成における他者からの「恩」の影響について検討する一助としたい。

1、陸羯南の生涯

陸羯南は安政4年、弘前藩中田謙斎となほの子として誕生する。明治7年、宮城師範学校に進んだが、退学処分となった。上京後、フランス法律学専修の司法省法学校で学んだ。ここで加藤拓川らと知り合った。帰郷して新聞社に入り、さらに北海道の官立の製糖所にも勤めた。その後親戚の陸姓を継ぐ。明治14年、上京し、農商務省などのフランス語の翻訳を手掛ける。明治16年、太政官御用掛となり、新設の文書局に勤めた。この

頃、加藤拓川の甥の正岡子規の訪問を受けた。翌年、今居てつと結婚し、1男7女をもうけた。明治21年春に依願退職した。この年に谷干城・小村壽太郎・高橋健三・杉浦重剛らの援助を受け『東京電報』紙を創刊したが、翌春廃刊し、さらに浅野長勲の援助も受けて『日本新聞』を創刊し、33歳で主筆兼社長となった。明治25年、隣の住居に移り住んだ正岡子規を支援し、紙面を提供し、生活の面倒を最期まで見た。明治33年、国民同盟会に相談役として参画した。翌年、近衛篤磨に従い清国・韓国を視察した。近衛から『日本新聞』への資金援助を得た。明治36年、米欧に旅行し、帰国後静養中に肺結核を発症した。明治39年6月、健康不良と経営悪化から、『日本新聞』を伊藤欽亮に譲渡した。明治40年7月から咯血を繰り返し、9月2日51歳で没した。<sup>(2)</sup>

2、正岡子規と陸羯南

2- (1) 出会い

正岡子規と陸羯南の出会いは、子規が文学者となることに援助を惜しまなかった、叔父の加藤拓川の紹介による。拓川は外務省においてベルギー公使などの外交面で活躍し、20年間外交官として欧州で過

\* 四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科

ごしたのち、衆議院議員、貴族院議員を経て晩年は故郷松山の市長を務めた人物である。子規はその拓川を介して、のちの子規の文学革新の場となる新聞『日本』を主宰する陸羯南と出会うのである。

二人の初めての出会いは、明治16年6月である。司法省法学校以来の親友である加藤拓川から頼まれ、羯南は、上京したばかりの子規と四谷の自宅で会った。その時子規は、加藤の叔父から行けと言われたので来たと言ったという。11月フランスへ留学する拓川を横浜まで見送った時も陸羯南が一緒であった。明治18年にも子規は羯南を尋ねている。

## 2 - (2) 生活面の支援

明治23年、陸羯南は日本新聞社社長兼主筆になる。子規はしばしば陸を訪ねている。陸によると、「世が根岸の寓を尋ねてきて、来年は卒業のはずだが、病気のために廃学する積りだと語る。ドンな病気か知らんが、我慢して卒業したらどうだと勧めても決心はなかなか動かさない。近頃俳句の研究にかかつて、少しく面白味がついてきたから、大学を辞めてもっばらこれをやらふと思ふといひ、根岸に座敷を貸す家があらば、世話してくれ、と言つて帰つた。」<sup>(3)</sup> というのである。

また、東京帝国大学国文学科の退学を決意した子規は、松山の母方の叔父大原恒徳に、退学後の生活について手紙を書く。「陸氏のいふ処ハ『私病身なれば家族を呼び寄せて養生のできる丈力を尽すがよからふ それについて要する生計費はどうか工面の就かぬ事ハない』と簡様に注意しもらひ候」<sup>(4)</sup> と報告する。

子規は陸羯南の申し入れを受ける。松山から出てきた母と妹を神戸で迎えた。夕方、三人は東京についたが、「留守もりの雇女も無御座万事陸氏より世話ニ預り候（中略）飯も菜も火も湯も早風呂も皆皆陸よりの供給にて事足り申候 今朝に相成候ても少しも片付不申（中略）其内香の物、砂糖、醤油杯と続々陸よりもらひどうやら昼迄ハ相くらし申候」と書いた後、追伸で日本新聞社入社を伝える。「右手紙書き畢らぬ所へ陸より呼びに來り参り候処いよいよ毎日出社之事ニ相きまり候」出勤は「いやなときハ出勤致さずともよろしくと申候」というのである。子規の病身を配慮した破格な扱いである。「其のそのかはり月俸十五円ニ御

座候」と言われる。来年になれば少しは高くなるであろう、それまでの不足は私が出すと陸羯南は言う。さらに、わが社の給料が不満であれば、外の新聞社を紹介してやろうと言うことに対して、子規は「私ハまづ幾百円くれても右様の社へハはいらぬ積に御座候」<sup>(5)</sup> と陸羯南に伝えた。こうして日本新聞社の入社がきまったのである。

明治25年12月1日、子規は、日本新聞社に初めて入社した。その後、明治27年2月11日日本新聞社は小日本新聞社を新たに越し『小日本』を創刊した。陸羯南は子規を編集主任に抜擢した。子規は俳句の募集を始めたり、自らの小説を掲載したりした。しかし、日清戦争開戦直前廃刊となった。子規の落胆はその意気込みの大きさから計り知れないものと思われる。日本新聞に復帰後、紙上で俳句募集を開始した。これが日本新聞を拠点とする俳句革新運動のはじまりとなる。

一方、日清戦争において記者としての従軍を子規は志願した。子規の健康から従軍の許可はなかなか下りなかったが、子規の志は高かった。社内の反対を押し切り、陸羯南は子規を従軍記者として清に派遣することを決めた。明治28年4月、金州に到着するも、当時停戦状態で、戦況を伝えることもなく、子規は軍医として従軍していた森鷗外をたびたび訪れている。講和条約締結により、帰国を余儀なくされる。帰路船内での大量咯血。生死の境をさまようこととなる。神戸に上陸し、神戸病院での入院。その後須磨での療養、場を松山へ移しての療養。この間の付き添いの指示、入院費用、生活費等、一切を陸羯南が日本新聞で負担すると決めた。

明治28年5月26日付の書簡は陸羯南の細やかな配慮を表す部分であるので以下に示す。「代筆の御書面只今拝見、船中咯血被成候よし、御持病再発とは存じ候へども、万事御不自由の中にて御養生も不十分の間なれば、如何と御案申上候。中略 実は御帰朝の遅れ候事不思議に存じ、直に福本の方へ電報、貴兄の動静問合候処にて御座候。御病氣との報により又直に福本へ電して、誰か馬関へ向見舞可致す旨依頼候処、間もなく神戸御着の電報一昨日参り候故、又其事広島へ申通候間、多分今日頃福本は病院へ御尋ね申し上げ候事と存知候。御病氣の状況も同志より申越有之筈と待ち居候。 中略 御留守宅は別にかはり無之候。昨

日一寸御伺申候処へ、内藤氏来合候間、同氏と委細物語、御病状相分り次第時宜によりては御母妹を貴地へ越させ可申存候。尤も大阪には愚弟鉞朗義滞申候間、是へも申付け、小生妻の兄にて今居と申す医学士有之候故、大阪よりは其人御尋ね可申、これは大阪病院の眼科医長に御座候へども、御地の院にも知人可有之筈、万事無遠慮御相談願上たく存候。 後略」<sup>(6)</sup>

また、子規の病が回復に向かった時に送った手紙は以下の通りである。

「拝啓 思いの外御快癒も捗りはや御退院のよし、大慶此事に存候。昨日高浜君も見え近況拝承、至極の好結果嬉敷存候。此上は一層御注意、速に御帰京祈上候。 後略」<sup>(7)</sup>

追伸として、金銭的な援助について

「精算余剰は御返しに不及、来月中は入院中と見做して其金を社より差上候。其後は御自弁と被成度候。」<sup>(8)</sup>とある。

すなわち追伸のかたちで余ったお金は返さなくて良いと、さりげなく大きな配慮が添えられている。

また、子規に直接充てられた書簡以外にも、陸の子規への配慮を表す書簡がある。一通は六月二日付の高浜虚子宛である。もう一通は六月九日の日付の竹村鍛、虚子、河東碧梧桐の三人に宛てられたものである。

虚子宛の書簡には、虚子の献身的な看護に対するお礼、碧梧桐の付き添いで母八重が神戸に向かったこと、入院費用や虚子の滞在費はすべて社が負担することなどが記されている。二通目の書簡には、詳細な病状報告に対するお礼、快方に向い一安心していること、一日一円の入院費と、虚子の経費として月五円の計算で、六月分として三十五円を送ったこと、その他の相談があれば遠慮なく申し出ることなど、とにかく何も心配せずに子規の看病にあたって欲しい旨が書かれている。子規のいのちの一大事にあたり、陸は付き添いの指示、入院費用、生活費等、精神面、すべての面で子規を支えたのである。

このように羯南の子規に対する細やかな配慮、深い愛情、これを恩と呼ばずしてなんと表現すべきであろうか。

## 2 - (3) 精神面の支援

子規は従軍からの大量咯血から回復したのち、養生のため松山に帰省し、夏目漱石の下宿で生活を共にした。10月末に東京に戻り活動を再開するが、しかし翌明治29年2月、脊椎カリエスと判明する。以後35年の死に至るまで病牀にありながら、日本新聞社社員として『歌よみに与ふる書』や『病牀六尺』『墨汁一滴』などを『日本新聞』紙上に発表し続けた。

子規の羯南に対する思いは明治33年2月12日付、熊本の夏目漱石宛の書簡に綴られている。「例の愚痴談だからヒマナ時に読んで呉れ玉へ、人に見せては困ル、二度讀マレテハ困ル」で始まる長文の手紙である。「『日本』ハ賣レヌ、『ホト、キス』ハ賣レル、・・・僕ガ『ホト、キス』ノタメニ忙シイトイフコトハ十分知ツテイル故・・・僕ニ日本ヘ書ケトハイハヌ、ソウシテイツデモ『ホト、キス』ノ繁昌スル方法ナドライフ、・・・ソレテ陸氏ノ言ヲ思ヒ出ストイツモ涙ガ出ルノダ、徳ノ上カライフテ此様ナ人ハ餘リ類ガナイト思フ。」<sup>(9)</sup>

子規が漱石に送ったこの手紙は、明治33年2月12日付であるが、この日は陸羯南の亡くなった長男の葬式である。しかし、病臥の子規は参列できない。俳句誌『ホトトギス』にばかり力を注ぐばかりで、『日本』に協力しないことを気にし「陸氏ノ言ヲ思ヒ出ストイツモ涙ガ出ルノダ、徳ノ上カライフテ此様ナ人ハ餘リ類ガナイト思フ」というのである。そして、羯南のことを書いているうちに涙を流した。その涙で濡れた跡が残る有名な書簡であり、子規がいかに関南という人物に深く恩を感じていたかがわかるものである。

また子規自身の書いたものとして他に『仰臥漫録』中の記事がある。明治三十四年十月のことである。「五日ハ衰弱覚エシガ午後フト精神激昂夜ニ入りテ俄ニ烈シク乱狂乱罵スル程ニ頭イヨ々々苦シク狂セントシテ狂スル能ハズ独リモガキテ益苦ム 遂ニ陸翁ニ来テモラヒシニ精神ヤ、静マル 陸翁ツトメテ余ヲ慰メ且ツ話ス 余モツトメテ話ス」<sup>(10)</sup>

子規は病が重くなり精神的にも肉体的にも苦痛の極にあった時、このように陸羯南に来てもらい慰められ心身の平安を保っていたのである。

また、虚子が綴った文章には次のような記述がある。「明治三十五年一月十九日 日曜 午後大

風・・・羯南先生ハ親シク子規君ノ手ヲ握リ額ヲ撫デ慰メテ居ラレル・・・アトデ子規君ノ話ニコノ間某新聞ニメスメリズムノ話ガアツタガアレト同シ事デ羯南翁ノヤウナ感情的ナ人ニ手ヲ握ツタリ額ヲ撫デタリシテ貫ウト神経的ニ苦痛ヲ忘レル・・・」<sup>(11)</sup>

メスメリズムというのは暗示による催眠療法を指している。子規は羯南を「感情的な人」と捉えている。思いやり深く情感豊かな人ということと思われる。このような陸の人柄ゆえ病苦から精神的に一時でも解放されるのだと思われる。

## 2 - (4) 墓碑銘

子規は以上のように陸羯南から生活面、精神面両方から支えを得ていた。それに対して子規がどれほどの深い思いを抱いていたか。そのことを示すのは、子規自身が明治31年に書いた「墓碑銘」である。

子規が、「コレヨリ上一字増シテモ餘計ヂヤ」と断って、記したのは、  
「正岡常規又ノ名ハ處之助又ノ名ハ升又ノ名ハ子規又ノ名ハ瀬祭書屋主人又ニ名ハ竹ノ里人 伊豫松山ニ生レ東京根岸ニ住ス 父隼太松山藩御馬加番タリ卒ス 母大原氏ニ養ハル 日本新聞社員タリ 明治三十〇年〇月〇日没ス 享年三十〇 月給四十圓」<sup>(12)</sup>

自身のことはただ「日本新聞社員タリ明治三十〇年〇月〇日没ス享年〇月給四十圓」とだけ記す。子規が勢力を傾けた俳句のことも短歌のことも『ホトトギス』のことも出てこない。日本新聞社員ですべては尽きている。これは子規の誇りであった。子規が病気のために寝たきりとなった7年間、病床から俳句革新運動や短歌革新運動を進めることができたのは、陸羯南の支えが大きかった。入社の際には月給15円。その後明治27年2月『小日本』編集責任者となり、月給30円、28年10月『俳諧大要』、29年3月『松蘿玉液』、34年4月『俳人蕪村』を次々発表する。31年月給40円となる。2月に『歌よみに与ふる書』を発表。34年1月『墨汁一滴』、35年5月『病床六尺』を死の直前まで連載した。晩年の子規は『日本』に文章が載ることだけを心の励みにしていたのである。

## 3、子規にとっての陸羯南一恩とは

恩とはいかなるものであろうか。拙稿において以下のような点を取り上げた。

『日本書紀』や『古語拾遺（しゅうい）』などの日本の古典に出ている「恩」は「めぐみ」「みいつくしみ」「みうつくしみ」などと訓（よ）まれている。そして「めぐみ」は、草木が芽ぐむなどというときの芽ぐむを名詞形にしたものとされているが、草木が芽ぐむのは冬眠していた草木の生命力が陽春の気にはぐくまれて目覚めることによる。そのようにある者が他の者に生命を与えたり生命の発展を助けることが恩を施すことであり、その逆が恩を受けることであるとみられる。<sup>(13)</sup> と。

草木が芽吹くように子規の才能が陸羯南の恩によって活かされ開花していく。のびのびと生きていく場を与えられ、自己と作品とに命を吹き込む場をあたえられた。しかしその恩に対して病人である子規は、ただひたすら恩を受けながら、「書くこと」「表現すること」のうちに最後の生を全うするのである。

拙稿で取り上げた山折哲雄<sup>(14)</sup>は、「恩」という問題について長谷川伸の「恩というのは、返すものではない。恩は着るものである。」という言葉に注目している。

「恩を返そうとすれば角が立つ、情が棚上げされるからだ。そしてそれは意地っ張りにも見える。黙ってありがたく頂いておけばいいのだ。その感情の微妙な動きが『着るということ』によく表れている。恩の背景には義理とか人情とかという感情にまつわる人間関係がまつわりついていて、そういう義理とか人情の世界で生きている人間が、ある大切な人から、ある助けを得たときに、それは黙っていただいておけばいい、着ればいい、それが恩人というものにたいする大事な態度であり、礼儀」だというのである。<sup>(15)</sup>

このような返す当てのない恩を思うとき、子規は涙にくれ、陸氏を「感情的な人」といい（恩情のある人という意味）、その返す当てのない恩を「墓碑銘」の中で後世に刻んだのであった。そしてその恩をいのちの原動力として、恩に着ながらいのちの炎を最後まで自己と自然とを表現することで表現のうちに生きたのである。

陸が世話をした子規の住居には、生前、高浜虚子、河東碧梧桐をはじめ寒川鼠骨、香取秀真、伊藤左千夫、長塚節、浅井忠、中村不折など俳人、歌人、

画家、友人知人門人などが集まり、句会や歌会、文学や美術などの談義をおこなった。

この住居は、子規庵と呼ばれて現存しているが、ここで子規と交わった人々が子規から受けた「恩」をそれぞれの人生に刻んでいるかもしれない。

恩は多くの場合は、与えられた恩に対して自己を良い方向に向かわせ、向上させることで、恩にみあう自己を少しでも形成しようとする原動力としてはたらくのではないと思われる。しかし恩と呼ぶほどの深いものは単純に返すことのできるものではない。常に、あるいは時折顔をのぞかせては恩に対してそれを返せない自分に負い目を感じる。あるいは恩を感じつつもそれに一途に向きあえない自己の状況。それでもやはり恩は恩なのである。脱げる当てのない、あるいは脱ぐことのできない恩をただひたすら身にまといながら生き続けるしかないのである。

しかし、子規は陸よりも先に逝く。その恩を着続ける証を「墓碑銘」は永遠に刻み続けるのである。「日本新聞社員タリ、月給四十圓」

これが子規の生きた証である。俳句でも『ホトトギス』でもないのである。生きる場を最後まで与えてくれた「日本新聞」、すなわち陸羯南こそが子規にとっての生涯の恩そのものである。

## 結び

かねてより、人間が生まれてから死ぬまでの間で、人から得た「恩」というものはいかにその人の生涯に影響を及ぼすのか、人間形成上の問題にどのようにかわるのかとの問題意識から、山折哲雄の恩人観、さらに今回正岡子規における陸羯南からの影響について考察した。

三人の恩人の恩を身にまといながらとほとほと人生の後半の道を歩くという山折哲雄。返す当てのない恩を「墓碑銘」として永遠に消えないものとして刻んだ正岡子規。いずれの場合も、恩とは人が人間として醸成されていく中でその人の生涯に決定的な何物かを与え続ける存在であるように思われる。今後さらにさまざまな角度から「恩」と人間形成に焦点を当て考察を深めていきたい。

注

- (1) 拙著 工藤真由美 『正岡子規の教育人間学的研究—写生観・死生観生成過程の分析から』風間書房 1996年（平成8年度文部省科学研究費助成金「研究成果公開促進費」交付による）
- (2) 『陸羯南全集』第十巻 みすず書房 2007年 巻末年譜
- (3) 『子規全集』別巻ニ 「子規言行録序」陸羯南 講談社 1975年
- (4) 『子規全集』第十八巻 講談社 1975年 P183
- (5) 『子規全集』第十八巻 講談社 1975年 p 230
- (6) 『陸羯南全集』第十巻 みすず書房 2007年 pp84 - 85
- (7) 『陸羯南全集』第十巻 みすず書房 2007年 pp85 - 86
- (8) 同上
- (9) 『子規全集』第十九巻 講談社 1975年 p 467
- (10) 『子規全集』第十一巻「仰臥漫録」講談社 1975年 p 383
- (11) 『子規全集』第十四巻「子規居士病牀日誌」高浜虚子 講談社 1975年 p 357
- (12) 『子規全集』第十九巻 講談社 1975年 p 227
- (13) 小学館 日本大百科全書
- (14) 拙稿 工藤真由美 「「恩」と人間形成—山折哲雄の恩人観を手掛かりに—」四條畷学園短期大学紀要 第50号 2017年 pp66 - 73
- (15) 山折哲雄『恩人の思想』ミネルヴァ書房 2017年 p 21

- 2018.8.10 受稿、2018.8.10 受理 -